
十月林檎と葛城男爵

当真伊純

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十月林檎と葛城男爵

【Nコード】

N0215Z

【作者名】

当真伊純

【あらすじ】

食い意地が張っていることと体力馬鹿なことを除けば、御堂神奈^{みどうかんな}はどこにでもいる女子高生だった。だから、学園の王子と名高い葛城璃人^{かつらきりひと}と関わる日など一生来ないと思っていた。

しかし、ある夜を境に、神奈と璃人の関係は一変する。

KY少女とツングレ少年でお送りする学園ファンタジー、なのかもしれない。

火曜夜、出会って（前書き）

またの名を、KY少女とツンギレ王子

火曜夜、出会って

月のない夜は影が薄い。

だからこそ、自分と闇の境界があいまいになるような気がして、ひどく不安になる。

それは、今年高校生になったばかりの少女、御堂神奈^{みどうかな}にとっても例外ではなかった。

「なんで今日に限って部活が長引くよう」

間延びした声でつむがれる不満を聞くのは闇ばかりだ。

八時も過ぎると、公園も昼間と様相を一変させていた。

ふいに駆け抜けた風が神奈の肩ほどの長さの髪を翻す。視界の端に横切る影をとらえ、とっさにその方を見やるが、何もいない。

茂みのざわめきは、ただ単に野良猫が潜んでいるだけ。

見間違いや小さな物音に、ほんの少しの想像力が加わる。それだけで、通り慣れたはずの公園が、見知らぬところに見えてしまう。

しかし、ここを通るのが家までの一番の近道、手段は選んでいられない。

「神奈、女を見せるのよ。ビブレイブ！ ボーイズビーアンビシヤス！」

恐怖のあまり、独り言も迷走する。しかし、神奈はどうしてもここを通らなければいけない事情があった。今更引くことはできない。「なにも出ないよー。怖くない、怖くない」

自分に言い聞かせるためにつぶやく。だが、言葉とは裏腹に、黒目がちの瞳は、せわしくあたりをうかがっている。

すると、何かが神奈の前方を通り過ぎる。今度は気のせいではない。

学ランを着た少年だ。

形は普通の学ランだ。しかし、カラーからボタンの部分にかけて臓脂の縁取りがあるのは、神奈の通う高校のものだけ。そして、見

間違いでなければ、彼は神奈のクラスメイトだ。神奈には気がついていないようだ。

「一緒に、出口まで行ってくれないかな」

少女は淡い期待を胸に一步踏み出す。それが、始まりの一步だとも知らずに。

神奈がほんのわずかな違和感を覚えたのは一瞬。まるでなにかに阻まれるように、その一步がひどく重かったのだ。

「今の、なに……？」

いぶかしく思ってしまった、二歩目を踏みだせない。そうして立ち止まった足が、今度は後ずさりするように後ろへ踏み出される。

立ったまま夢を見るような癖はない。

想像力はあまり豊かではない方なので、常に現実を見ているはずだ。

だからこそ、自分の目の前に突如として現れたモノも、それが自分の進路を阻んでいるということもすべてが受け入れがたかった。

化け物。

声なき声で神奈はそれと呼んだ。

そう呼ぶしかない形状を、それはしていた。

姿形は犬に近いが、犬よりも大きく裂けた口からは鋭い牙がのぞく。漆黒の毛に覆われた体からは太い四肢が伸び、先端には驚くほど伸びた爪が生えそろうている。

そして、大きかった。十分な距離を隔ててもなお、すべてが神奈を圧倒し、その場から逃げることを許してくれない。

光る眼が神奈を捉えた。

本能が訴えている。

逃げなさい、と。

しかし、脳内に鳴り響く警鐘にもかかわらず、神奈の足は少しも動いてはくれない。

裂けた口からもれる唸り声と、心臓の早鐘だけが世界に満ち、視界のすべては化け物で埋め尽くされる。

今、この世界にいるのはまるで神奈と化け物だけであると錯覚してしまいそうな、長い、長い一瞬。それを経て、時は再び動き出す。化け物の四肢が大きく地面を蹴った。神奈に、飛びかかるためにまるでスローモーションにした映像のように、それは段々、神奈の視界を占めていく。

掲げられた右の前肢も、開かれた口からのぞく牙も、全てが神奈の命を奪うためのもの。

あ、ヤバいかも。

最後になるかもしれないのに、頭に浮かんだのはひどく間の抜けたフレーズだった。

走馬灯も、壮大な今わの際の言葉も浮かんできやしない。

恐らく次に聞えるのは獣が自分をなぶる音。その神奈の予想を、張り詰めた声が裏切る。

「どける！ 早く！」

予告もなく突き飛ばされれば、抗うすべもなく地面に倒れこむしかない。しかし、したたかに打った腰も、すりむいた膝の痛みも、今の神奈にはどうでもいいことだった。

なぜなら、神奈と化け物の間に入りこんだのは一人の少年だったからだ。

研ぎ澄まされた刃のような眼光で、彼は化け物を射抜く。

手に持つのは、一振りの杖。

先端に光る石がはめ込まれたそれは、木目の荒い木から削り取られたものだと分かる。

「我は呼ぶ。そなたを、誰よりも力を持ちしその姿を。我の前に示したまえ。雷電！」

少年の声に呼応するかのように、石が光を帯びていく。そして一際強く光を放った瞬間、化け物に向かって光が矢となり襲いかかる。犬にも似た、しかしもつと低く響く咆哮が公園中にこだまする。

圧倒的な存在感をもって神奈を制した獣は、今や少年によって蹂躪されようとしている。

神奈は化け物が吹っ飛んだ先と、自分を突き飛ばした少年を交互に見やり、ひたすら混乱するしかない。

飛びぬけて秀麗なその横顔は、さきほど見かけたクラスメイト――
葛城璃人かつらぎりひとのものだったからだ。

視線は化け物に注いだまま、再びなにかを音に乗せる。今度は先ほどよりも早く、低く。

「消え失せる」

冷えた、まるでなんの感情もこもっていないような声。その一言が引き金となり、葛城璃人の持つ杖から今度は炎がほとばしった。

火だるまになった化け物は、苦しみの余りのたうちまわる。そして、この世のものとは思えないほどおどろおどろしく、腹に響くような断末魔を上げ、動かなくなった。

全てが、終わったのだろうか。

少年はしばらくの間、ただ化け物を見下ろしていたが、今度は面を神奈の方に向ける。

「葛城、璃人くん、だよね……？」 常葉学園一年C組とぎわがくえんの「

しかし、彼のよこす視線は殺気立っていて、とても友好的に話せるような雰囲気ではない。

歩み寄る足取りもどこか重く、突き飛ばされて座り込んだままの神奈を見下しながら、彼は問う。

「そうだけど。誰だ、お前」

声音には、詰問の色が濃い。

クラスと一緒にあってから早三カ月だけど、随分な言い草じゃない。

などと言えるはずもなく、なんとか笑顔をひねり出して、神奈は名乗る。

「私、同じクラスの御堂神奈だけど」

切れ長の瞳が鋭く神奈を射抜く。それは先ほどの化け物に向けていたものと大差ない。

手には相変わらず杖が握られている。いつでも構えられるように、

しつかりと。

「どうやってここに入った。結界が張ってあったはずだ」

「待って。ストップ。とりあえずその杖をおろしてほしいんだけど」
懇願など気かけず、璃人は尋問を続ける。

「言え。どうしてここに入った。お前は奴らの差し金か。返答次第ではただではおかない」

彼の言葉の一つ一つが、神奈を更に混乱に陥れる。そんな中で神奈の脳裏に浮かんだのは、帰らなければいけない理由だった。

「なんでって、ドラマ……、そう！　ドラマ始まっちゃう！」

「ドラマ？」

やっと得たのは間抜けな答えで、険しいだけの璃人の表情に怪訝な色加わる。

しかし、神奈がわざわざこの公園を通ったのは、本当にただそれだけのためだった。

「そう、火曜九時から始まるでしょ！　ここ通らないと、家に早く帰れないの！」

混乱にまかせて、もはや道理を知らない子どものように神奈は喚き続ける。

そんな神奈に追い打ちをかけるかのように、璃人の脇からすり抜ける黒い影が、二人の間に割って入る。

「リヒト様、やめてくださいまし！　本当になにもご存じでないようではないですか！」

神奈を背にかばい、璃人に向かって訴えたのは黒猫だった。

「ディアナ、お前は黙っている」

「猫が、しゃべってる」

混乱の元が更に追加されて、もはや叫ぶこともできず、神奈は呆然とつぶやく。その様を目にして、璃人はやっと力を抜いたようだ。

「お前、本当に何も知らないのか」

「逆に私が何を知っているのか教えてほしいくらい。なんで猫が喋ってるの」

神奈の疑問に璃人は答えない。答えないまま、再度焦れたように尋問を続ける。

「もう一回聞く。どうやってここに入った」

「だから、私は急いでるんだってば！ ドラマ、今日なの！」

「分かった。だったら、今すぐそのドラマのことしか考えられないようにしてやるよ」

「ちよつと、え、え、え、待って！」

ためらいもなく杖がかざされる。

ああ、自分も殺されてしまうのか。

そう覚悟しかけた瞬間、神奈は化け物の目が再び光を宿したのを確かに捉えた。

それは、璃人の方に向けられている。殺意をもって。

「葛城くん、危ない！」

抜けたままの腰も、震える体も、全てが正常に戻る。そして衝動のまま、神奈は目の前の少年に体当たりをかました。

突然の衝撃に璃人は仰向けに倒れこむ。その直後、獣の一閃が二人のいた場所を掠めた。

おそらく、これが最後の抵抗だったのだろう。再び地面に体を打ちつけたままの化け物は、ついに動かなくなってしまった。

「大丈夫？」

興奮冷めやらぬ神奈は、肩で息をしながら自分に組み敷かれている璃人に問う。しかし、肝心の少年と言えば、先ほどの冷酷な面持ちはどこへ行ったのか顔を青ざめさせている。

「俺に触るな！」

「だって、よけなきや葛城くん怪我してたんだよ！ 下手したら死んでたかも」

しかし、璃人は眼前の神奈の胸をとらえるなり、叫びは更に大きくなる。

「俺にその汚物を近づけるな！」

「花の女子高生の胸を汚物扱いとか！」

しかし、神奈の訴えを聞き入れることもなく、わめく璃人は鳥肌すら立てていた。

彼は今、明らかに怯んでいる。自分の優位を理解した神奈はこの機を逃さなかった。

倒れた時に脇に放り出してしまった鞆をひつつかむと、神奈は地面を蹴り、駆けだす。

「待て！」と制止する声が聞えたような気がしたが、後ろは見ない。捕まる時はなにをしたって捕まるのだ。今はひたすらこの場から逃げ出すことのみに徹する。

そうして、無我夢中で家にたどり着き、家の扉を開ける直前、一度だけ振り返る。

そこには、誰もいない。

影が、ふいに揺らめいた気がしたが、それを無視して、神奈は家中に飛び込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0215z/>

十月林檎と葛城男爵

2011年12月2日17時54分発行